

ユスト高山右近の生涯と信仰

96

加賀で26年、迫害迫る

慶長13(1608)年には、降誕祭を盛大に祝おうと考えた

ユスト高山右近は、追放の地、加賀で26年を過ごしました。日々の生活の中心は、前田利長に仕える武士としての仕事もあったでしょうが、信仰を伝えることと茶の湯でした。

右近は利長のキリシタン保護のもと、宣教活動を続け利長の家臣からも12人ほど洗礼を受けました。また、全国から右近を慕ってキリシタン武士が加賀に集まってきました。

右近は、教会や多くの人を収容できる司祭館を自費で建設しました。さらに、熱心に願って慶長10(1605)年頃、一人のペアデレとイルマンを金沢に迎えました。彼らの生計の面倒も右近が見ていました。

そのような中で、右近の娘ルチアが旧知の横山長知の嫡男、康玄と結婚しました。慶長14(1609)年3月18日、利長の隠居地である富山が大火に見舞われ、城と町が炎上してしまい、城を高岡に移して築城するために右近は奔走しました。

右近は、高槻時代の主君だった荒木村重を通じて千利休に出会い、その高弟子七哲の一人になりました。利休の侘茶を受け継いだ一人に、織田信長の弟、織田有楽斎がいます。彼が右近の茶を評して、「右近の茶には大病があつて、真の清いということを知らない。露地のほとりは言うに及ばず、方々の脇々の縁の下まで掃き清めて、掃除に際限がない」(喫茶余録)と書き残しています。信長、秀吉、家康の三大に仕えた有楽斎でしたから、清濁あわせて飲み込まなければならなかったこともあったはずで、

秀吉にも家康にも、どのような人にもおもねることない生き方を貫いた右近でした。一筋にキリストの福音を生きたことだけに専念をした右近の生きざまが、茶の湯にも表れています。自らを「南坊」と名乗った茶人右近は、加賀に追放された後も、茶室を祈りの場とし、神を想って祈り続けました。その茶の湯の心が、右近の信仰を育て、人としての成長と生き方に大きな影響を与えました。

平穏な暮らしを送る右近のもとに、新しい家康の動きと、ある事件の一報が飛び込んできました。それを知った右近の額に汗がにじみます。「迫害の日に近い……」右近は、そうつぶやくと茶室に向かいました。

「生きろ」―難民移住者

あなたが助けてください

アフガニスタンのほぼ全土をタリバンが制圧して以来、国内外から私のもとに少数民族のハザラ人たちが毎日のように電話がかかります。

「あなたに助けをください」



特に現地カブールからは恐怖に慄く声が生々しく伝わります。「篤子さん、助けてください」と切迫した声で求められ、私には返す言葉が何一つありません。と同時にこの言葉は21年前に出会ったハザラ人の言葉を私に蘇らせるのです。

「あなたが助けてください」

2000年秋のあの日、教会に難民支援を求めたきたハザラ人に、私は「うちではとてもできな

たからですが、その人は目をそらさずに私に言いました。「あなたが助けてください」。

あれから21年。いま、再び、ハザラ人から「助けてください」と言われて

います。しかし各国政府も容易に近づけないアフガニスタンからの救出など、私に一体何ができましようか。

私は在日のハザラ人女性たちと話しました。彼女たちはタリバンがハザラ民族を虐殺した当時を生き抜いた経験があるだけに、祖国の惨状に身の毛のよだつ恐怖と無力感に苛まれていました。私は「あなたの家族の誰か、たった一人でも救えないかな」と提案

しました。一人を助けたところから始めれば糸口が見つかるかもしれないと思つたのです。女性たちは「それなら頑張れるかもしれない」

カトリック墓地 納骨堂・納骨所 使用者募集

大阪教区の信者の方のみがお申込みいただけます。詳細は資料をお送りさせていただくほか、インターネットでもご覧になれます。教区ホームページ上のこのバナーをクリック

カトリック墓地 納骨堂・納骨所

資料請求やお問い合わせは 教区本部事務局 管理課 竹中まで ☎ 06-6941-9705



わたしは復活であり、命である。ヨハネ11・25

